男声合唱団 昴 第4回コンサート

人間の尊厳をうたう

プログラム

●プロローグ・地平線のかなたへ　より「春に」/木下牧子作曲

第1部　生きるよろこびをうたう

・淀川三十石舟唄 … 千原英喜作曲
・アムール河の波 … M.キュッス作曲・本並美徳/男声版編曲
・白樺 … M．フラトキン・作曲
・道 … A．ノビコフ作曲
・ぶどうとかたばみ … 谷川　雁作詞・新実徳英作・編曲
・花のうた … 佐藤　信作詞・林　光作曲
・林光 … （日本抒情歌曲集）より
　「ゴンドラの唄」「浜辺の歌」
・雨 … 多田武彦・組曲「雨」より
・「鴎」「サッカーによせて」 … 木下牧子作曲

第2部　ピアノ・ソロ　近藤　静

ショパン
・バラード第１番　ト短調　op.23
・バラード第３番　変イ長調　op.47

第3部　人間の尊厳をうたう

・死んだ男の残したものは … 谷川俊太郎作詞・武満　徹作曲
・林道人夫 … 藤原和義作詞 作曲・さのよしひこ編曲
・ヤマよ夕張よわがいのちつげよ … 森谷たけし作詞・高平つぐゆき作曲
・地底のうた … 荒木　栄作詞・作曲
・労働者はいいぞ … 橋本邦久・労働者はいいぞ製作委員会作詞
・日々草 … 星野富弘作詞　加羽澤美濃作曲
・川の流れのように … 秋元　康作詞・見岳　章作曲
・華厳経 … 柴田南雄作曲
・他

●指　揮 ： 本並 美徳　/　檀 美知生
●ピアノ ： 近藤　静
●アコーディオン ： 宝木　実
●合　唱 ： 男声合唱団「昴」
　「地底のうた」をうたう男声合唱団

2008年 4/27(日)
PM1:00 開場　2:00 開演

ザ・シンフォニーホール
ＪＲ環状線福島駅より北へ徒歩5分
ＴＥＬ 06-6453-1010

● A席 ¥2,300（前売り指定）
● B席 ¥2,000（当日指定・12：30より座席券と引き換え）
未就学児童は入場できません

ピアノ・ソロ　近藤　静

お問い合わせ ▶ 090-8168-9347（岡邑洋介）　090-6058-5652（立川孝信）　090-9270-2971（本並美徳）
男声合唱団「昴」ホームページ ▶ http://homepage2.nifty.com/subaru-mcs/

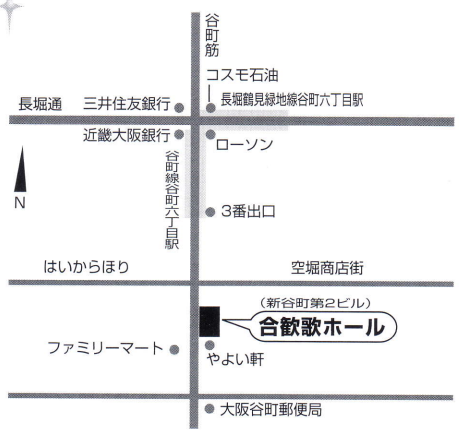
団員募集

「地底のうた」をシンフォニーホールで歌いませんか！

練習日　第1・第3・第5金曜　18：30から
第1・第3・第5日曜　14：00から
会　場　合歓歌（ねむか）ホール
地下鉄谷町線「谷町6丁目」③番出口南徒歩2分
新谷町第2ビル308号
〒542−0012　大阪市中央区谷町7丁目1-39
新谷町第2ビル308号

団　費　月2500円（正団員の場合）

連　絡　岡邑洋介（090-8168-9347）
立川孝信（090-6058-5652）
本並美徳（090-9270-2971）



＜プロフィール＞ 男声合唱団昴

軍国主義教育の中で育った当時15才の藤後少年（現団長）は、自ら志願して満州に渡った。

日本の敗北であわやシベリア送りという時、少年の消え入りそうな心をふるい立てる歌に出会った。

それがロシア兵の男声合唱だった。

少年は思った。いつか日本に帰ってこんな男声合唱団をつくりたいと。

2000年春、その願いが叶った。 音楽は平和の力・生きる力をモットーにして、大阪に「昴」が産声を上げた。

憲法を守る九条の会で、斗いを励ます労働者のつどいで、ミュージカルの舞台で、中国南京や佐渡の旅で、そして日本のうたごえ祭典で、旺盛に演奏活動を展開してきた。

練習の後は飲み会で大交流、各々の人生を語り、未来を語り合う。

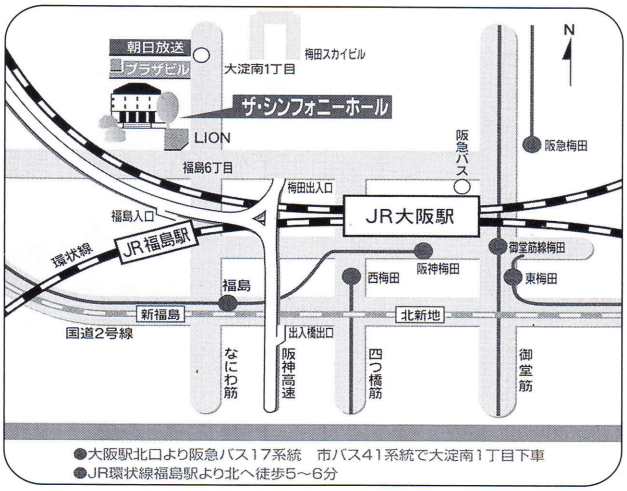
平均年令65才ながら、身も心も青春真盛り、50名の団員で、第4回コンサート（ザ・シンフォニーホール）を成功させようと燃えている。

2000年	団結成
2002年	日本のうたごえ福岡祭典コンクールで1位
2003年	同　長野祭典コンクールで3位
2004年	ファストコンサート（950名）
2004年	日本のうたごえ沖縄祭典コンクールで1位
2005年	同　広島祭典コンクールで1位次席
2006年	セカンドコンサート（1100名）
2006年	日本のうたごえ福井祭典コンクールで2位次席
2007年	春を呼ぶサードコンサート（600名）

＜プロフィール＞ 近藤　静（ピアノ）

6歳よりピアノを始め金澤奈津子、（故）金澤益孝の両氏に師事。大阪芸術大学にて（故）金澤益孝、田中伴子氏のもとで研鑽を積むが、3回生在学時に参加したイェルク・デームス氏の夏期講習会にてウィーン留学を勧められ、以後、7年間ウィーンに留学。ウィーン市立音楽院在学中は、ゲルハルト・ゲレチュレーガー、オットー・プロープストの各氏に師事。ウィーン市立音楽院ピアノ演奏科卒業。ディプロム取得。留学中ドイツにてクラウス・シルデ、ウィーンでルドルフ・ケーラーのマイスタークルスに参加し各地で演奏する。2003年滋賀県フィガロ・ホールにてリサイタル。2004年いずみホールにて関西フィルハーモニー管弦楽団とベートーヴェンのピアノ協奏曲≪皇帝≫を共演。2005年芦屋にてクラリネットの仲田眞弓氏とデュオ・リサイタル。2006年4月大阪・フェニックスホールにてリサイタル。現在、京都市在住。後進の指導、室内楽、声楽の伴奏者として、また師デームス来日時には通訳者としても活動している。2005年秋より昴のピアノ担当。

ザ・シンフォニーホール略図



男声合唱団《昴》
第4回コンサート
人間の尊厳をうたう

2008年4月27日
ザ・シンフォニーホール

プログラム

プロローグ 「地平線のかなたへ」より「春に」 谷川 俊太郎/作詞　木下 牧子/作曲

第１部　生きるよろこびをうたう

淀川三十石舟唄	大阪民謡	〔ソロ：乾　正明〕
浜辺の歌	林 古渓/作詞　成田 為三/作曲　林 光/編曲	
ゴンドラの歌	吉井 勇/作詞　中山 晋平/作曲　林 光/編曲	〔ソロ：檀 美知生〕
アムール河の波	K.ワシリエフ・S.ポポフ/作詞　M.キュッス/作曲　本並 美徳/編曲	〔ソロ：富樫 龍一〕
道	L.オシャーニン/作詞　A.ノビコフ/作曲　中央合唱団/訳詩	〔ソロ：浅井 和夫〕
白樺	V.ラザレフ/作詞　M.フラトキン/作曲　関 鑑子/訳詩	
ぶどうとかたばみ	谷川 雁/作詞　新実 徳英/作・編曲	
花の歌	佐藤 信/作詞　林 光/作曲	〔ソロ：富樫 龍一〕
雨	八木 重吉/作詞　多田 武彦/作曲　土肥 永津子/ピアノ編曲	〔ソロ：樋渡　誠〕
鴎	三好 達治/作詞　木下 牧子/作曲　本並 美徳/編曲	
サッカーによせて	谷川 俊太郎/作詞　木下 牧子/作曲	

第２部　ピアノ・ソロ　　近藤 静

ショパン
　バラード第１番　ト短調　作品23
　バラード第３番　変イ長調　作品47

……休　憩……

第３部　人間の尊厳をうたう

死んだ男の残したものは	谷川 俊太郎/作詞　武満 徹/作曲　赤堀 文雄/編曲	
林道人夫	藤原 和義/作詞・作曲　さの よしひこ/編曲	〔ソロ：奥村 克美〕
ヤマよ夕張よわが命つげよ	森谷 たけし/作詞　高平 つぐゆき/作曲　檀 美知生/編曲	
地底のうた	荒木 栄/作詞・作曲　本並 美徳/編曲	〔ソロ：千秋 昌弘〕
労働者はいいぞ	橋本 邦久・労働者はいいぞ制作委員会	
日々草	星野 富弘/作詞　加羽澤 美濃/作曲　本並 美徳/編曲	
川の流れのように	秋元 康/作詞　見岳 章/作曲	
華厳経	柴田 南雄/作曲	
I've got six pence	古庄 雄二/訳詩　福永 陽一郎/編曲　土肥 永津子/ピアノ編曲	

●指　　揮：本並 美徳　/　檀 美知生
●ピ　ア　ノ：近藤 静
●アコーディオン：宝木 実　/　安場 みどり
●合　　唱：男声合唱団「昴」
　　「地底のうた」をうたう特別合唱団
●司　　会：ケイ・シュガー

曲目解説

ぶどうとかたばみ

長年の大国の抑圧からやっと解き放たれた喜びも束の間、他民族、他宗教間の軋轢を生み、国内戦争が起こる。この歌は、20万人が犠牲となったボスニア・ヘルツェゴミナ戦争の悲劇を歌っている。作詞者の谷川雁は、鮮烈な言葉で読む人の心を一瞬にとらえてしまう詩人として知られている。

花の歌

「アメリカの裏庭」といわれ続けてきた南アメリカ諸国にも、いま、アメリカの支配を断ち切る新しい花の芽が、つぎつぎに芽生えている。この歌は、キューバ革命にも参加し39歳で他界したチェ・ゲバラの闘いを描いた佐藤信の作詞。それに林光が曲をつけている。

鴎

大阪市生まれの詩人三好達治の、終戦直後（1946）の「砂の砦」より。三好達治は優しい文体で多くの愛踊詩を生んだ。この詩は、軍国主義の暴虐から解放された戦後の自由の中で作られ、「ついに自由は彼らのものだ」が何度も繰り返されている。戦前に戦争詩も書いたという作者の陰影がこの詩の客観的な表現に反映されているという見方もある。

ヤマよ夕張よ わが命つげよ

映画「幸せの黄色いハンカチ」で有名な坂道と緑の多い町夕張はかって炭鉱で活況を呈していた。だが1981年10月にガス突出事故が発生し、31人の死亡が確認されたが、62名は地下火災により、死亡確認もないまま注水され殺された。

この歌は、三池闘争でも闘った檀上さわえが、いち早く夕張支援に駆けつけ、自身のリサイタルのために委嘱・初演した組曲「鳩よ飛べ夕張へ」の1曲。詞は今も夕張再建のために闘っている元炭鉱労働者、森谷たけしによる。

地底（じぞこ）のうた

アメリカの日本への石油エネルギー支配を背景として、1960年三井三池炭鉱は、1278名にのぼる合理化指名解雇を発した。これに抗する労働者に、武装警官、右翼暴力団などが激しく襲いかかった。この闘いは、安保闘争と結合して全国的な歴史的反合理化闘争となって発展した。自らも炭鉱労働者であった荒木栄は、生産現場の生々しい言葉を聞き取り、労働者のたくましさ、温かさ、誇らしさを謳いあげ、うたごえ運動における金字塔といえる組曲を作りあげた。

華厳経（けごんきょう）

大乗仏教の経典のひとつ。世界に存在する一切のものは、すべて微塵なものからなりたち、ひとつの微塵のなかに全世界を映しており、一瞬のなかに永遠を含んでいる。それらはたがいに等しく結びつき、そのすべてが、存在の意味を有しているという。華厳経はこうした世界観を説いている。

ショパン

バラード 第1番 ト短調作品 23番
バラード 第3番 変イ長調作品 47番

第1番ト短調は、映画「戦場のピアニスト」でも主人公がドイツ将校の前で演奏した曲としても有名で、ショパンの祖国への想いと、祖国を侵略するロシア軍への激しい怒りが激情となって素直に現われ曲。第3番変イ長調は、「水の精」という副題がついている。青年が岸辺で出会った少女に愛を誓うが、男の永遠の愛など信じない少女は、水の精に姿を変えて青年を誘惑する。たちまち心を奪われた男は、決して捕らえられない水の精を追いつづける罰を負わされる。

男声合唱団「昴」のあゆみ

2000年　うたごえの現役やOBたち20人で結成
2002年　日本のうたごえ福岡祭典でA部門1位
2003年　日うた長野祭典でA部門3位。
2004年　ファーストコンサート（950名）
2004年　日うた沖縄祭典でB部門1位
2005年　日うた広島祭典でB部門1位次席
2006年　セカンド・コンサート（1100名）
2006年　日うた福井祭典でB部門2位次席
2006年　佐渡公演
2007年　春をよぶサードコンサート（600名）
2007年　日うた奈良祭典でB部門銀賞

指揮者 本並 美徳

指揮者 檀 美知生

ごあいさつ

団長　藤後博巳

本日は男声合唱団《昴》第4回コンサートに足をお運びいただき誠にありがとうございます。このコンサートの開催は、ひとえに皆様のご支援によるものと深く感謝いたしております。

いま、労働条件の悪化、低所得者層の増大が進み、時間的にも経済的にも文化を享受する国民の権利が圧迫されて、人間の尊厳がないがしろにされています。一方、企業と政府の責任を追及した薬害訴訟などに見られる「人間の尊厳を守るたたかい」も国民の大きな共感を呼んでいます。

私たちは、一人ひとりの生命が尊重され、だれもが安心して暮らしていける社会を願い、「人間の尊厳」を今回のコンサートのテーマにいたしました。これまでの演奏曲の集大成との思いを込めて、皆様のご共感をいただけるよう全力で演奏させていただきます。

近藤　静

ウィーン市立音楽院ピアノ演奏科卒業。ディプロム取得。これまでに金澤奈津子、(故)金澤益孝、田中伴子、イェルク・デームスら他各氏に師事。2003年滋賀県フィガロホールにてリサイタル。2004年いずみホールにてベートーヴェンのピアノ協奏曲《皇帝》を、関西フィルハーモニー管弦楽団と共演。2006年フェニックスホールにてリサイタルの他、数々の演奏会でソリストとして、また室内楽、声楽の伴奏者として活躍。音楽関係の通訳者としても活動。2005年秋より男声合唱団昴のピアノ担当。

ケイ・シュガー（本名 佐藤 圭子）

京都市出身。大阪民主新報の記者として働きながら（現編集長）2004年秋頃から自作曲などのピアノの弾き語りを始め、全国各地で音楽活動を展開。主なオリジナルは高齢者夫妻の人間賛歌「朝の風につつまれて」難病少女の生涯を歌った「天国に還った天使」や「多喜二へのレクイエム」。

出演

指揮　本並美徳　檀 美知生
ピアノ　近藤　静
アコーディオン　宝木　実　安場みどり

テノール1　池田垣二郎　伊藤　知　立川孝信　檀美知生
千秋昌弘　西川　寛　樋渡　誠　山本直一
吉田雄三　若園達雄
テノール2　岩本廣便　奥村克美　醍醐俊夫　高田和弘
寺脇伸育　西村　勲　馬場　宏　山本釟郎
米川　勲
バリトン　岡邑洋介　清水恭太郎　寺尾正明　富樫龍一
仲谷増広　長屋敏郎　長屋正義　橋本邦久
林　弘訓　松本幸広
バス　浅井和夫　石橋章一　乾　正明　相根義治
佐藤睦紀　土井一正　藤後博巳　西島国介
はが　武　広瀬禎男　藤田昭徳　三村千晴
「地底のうた」特別合唱団
大森輝夫　衣川洋一　清水賢造　新庄佑三
藤本　薫　三宅俊治　森川和男

団員募集

練習日　第1・第3・第5金曜　18:30から
第3・第5日曜　14:00から
会場　合歓歌（ねむか）ホール
地下鉄谷町線「谷町6丁目」③番出口南徒歩2分
新谷町第2ビル3階 308号
〒542-0012
大阪市中央区谷町7丁目1-39
新谷町第2ビル308号

団費　月2500円

連絡　岡邑 洋介（090-8168-9347）
立川 孝信（090-6058-5652）
本並 美徳（090-9270-2971）

男声合唱団《昴》第４回コンサート　演奏曲

春に

谷川俊太郎作詩
木下牧子作曲

この気持ちは何だろう　この気持ちは何だろう
目に見えないエネルギーの流れが
大地から足の裏を伝わって
この気持ちは何だろう　この気持ちは何だろう
僕の腹へ胸へそして喉へ声にならない叫びとなって
こみ上げる　この気持ちは何だろう
枝の先の膨らんだ　新芽が心をつつく　喜びだ
しかし悲しみでもある
苛立ちだ　しかも安らぎがある　憧れだ
そして怒りが隠れている
心のダムに堰き止められ　淀み渦巻きせめぎあい
今あふれようとする
この気持ちは何だろう　この気持ちは何だろう
あの空のあの青に　手を浸したい
まだ会ったことのない　すべての人と
会ってみたい　話してみたい
明日と明後日が一度に来るといい
僕はもどかしい　地平線のかなたへと歩き続けたい
そのくせ　この草の上でじっとしていたい
声にならない叫びとなって　こみ上げる
この気持ちは何だろう

淀川三十石舟唄

大阪民謡

ヤーレーサエー
伏見下がれば淀とはエーヨー
ここは枚方鍵屋前よ
アレサヨーエ
ヤレーサーエー
淀の上手の千両の松よ
ここは大阪八軒屋
ヤレサヨーエ

浜辺の歌

林　古渓作詞
成田為三作曲
林　光編曲

あした　浜辺をさまよえば　昔の事ぞ　偲ばるる
風の音よ　雲の様よ　寄する波も　貝の色も
ゆうべ　浜辺をもとおれば　昔の人ぞ　偲ばるる
寄する波よ　返す波よ　月の色も　星の影も
あした　浜辺をさまよえば　昔の事ぞ　偲ばるる
風の音よ　雲の様よ　寄する波も　貝の色も

ゴンドラの歌

吉井　勇作詞
中山晋平作曲
林　光編曲

命短し恋せよ乙女　紅き唇あせぬまに
熱き血潮の冷えぬまに　明日の月日は無いものを
命短し恋せよ乙女　いざ手をとりてかの舟に
いざ燃ゆる頬を君が頬に　ここには誰も来ぬものを
命短し恋せよ乙女　黒髪の色あせぬまに
心の炎消えぬまに　今日はふたたび来ぬものを

アムール河の波

Kワシリエフ・Sポポフ作詞
Mキュッス作曲
本並美徳編曲

見よ　アムールに波白く　シベリアの風たてば
木々そよぐ川野辺に
波逆巻きて　溢れ来る水　豊かに流る
船人の歌響き　紅の日は昇る　喜びの歌声は
川面を渡り　遥かな野辺に　幸を伝える
麗しの流れ　広きアムールの面
白銀成し　白銀成し　騒ぐ川波
広き海めざし　高まり行く波
白銀成し　白銀成し　騒ぐ川波
自由の河よアムール　麗しの河よ　故郷の平和を守れ
岸辺に日は落ち　森渡る風に　さざ波　黄金を散らす
平和の守り　広きアムール河
我が船は行く　しぶきを上げて
舳先に立てば　波音高く
開けゆく世の　幸をたたえて
見よ　アムールに波白く　シベリアの風たてば
木々そよぐ川野辺に
波逆巻きて　溢れ来る水　豊かに流る

道

シャーニン作詞
Aノビコフ作曲
中央合唱団訳詩

おお道よ　立つほこり　寒さにふるえ
繁るブーリャン
明日をも我知らず　いつ荒れ野の　露と消えん
ほこりは畑に　野辺に山に
あたりは火の海　弾丸は飛ぶ
おお道よ　立つほこり　寒さにふるえ
繁るブーリャン
鴉は上に舞い　友はブーリャンの中に眠る
けれどなお道は　ほこり込めて
炎果てもなく　燃えあがる
おお道よ　立つほこり　寒さにふるえ
繁るブーリャン
林に日は昇る　故郷出で　母ぞ思う
おお道よ　立つほこり　寒さにふるえ
繁るブーリャン　おお友よ思い出さん　ほこりの道
忘れられぬ　ああ

白樺

Vラザレフ作詞
Mフラトキン作曲
関　鑑子訳詩

乙女の髪に触れ　その眼差し追い
夜もすがらざわめく　葉擦れの歌聞く
白樺　白樺　何を　我に　告げる
白樺の歌は　かの春の歌か
忘れえぬ戦いの　厳し思い出の歌か
白樺　白樺　何を　我に　告げる
鉛の吹雪に　地上は焼け崩れ
若者は武器取り　戦いに行くか
白樺　白樺　何を　我に　告げる
モスクワ郊外の白樺　夜もすがら目覚め
パリのマロニエ眠らず　葉擦れの歌聞く
白樺　白樺　何を　我に　告げる

ぶどうとかたばみ

谷川　雁作詞
新実徳英作・編曲

朝焼け　言葉一つ弾ける　ぶどうの房に
弾音轟き　崩れる窓から　子供達が逃れる
流れた血潮は　そのままに錆びつく
敵とは友の蒔いたやさしさ　隣に生える苦しみの花
今日は昨日となにもかも違う
戦い止まぬ白いわが町　ほのかに熟れる　かたばみ
の鎖　地を這う憎しみ　蒼くもつれ　火となる
離れるすべない　人差しと引きがね　打たれた恋は
何処に埋める　つぶやくだけの　胸の夕焼け
今日は昨日となにもかも違う

花の歌

佐藤　信作詞
林　光作曲

小さな草が芽をふいた　それからそっと花つけた
多分そいつは遠い朝　それが僕らの歌だった

多分そいつは遠い朝　それが僕らの歌だった
小さな草が芽をふいた　それからそっと花つけた
多分そいつは遠い朝　それが僕らの歌だった
多分そいつは遠い朝　それが僕らの歌だった
僕らはいつかそこに居た　僕らはいつか見つめてた
春さえ来れば芽を吹いた　雨さえ降れば花つけた
春さえ来れば芽を吹いた　雨さえ降れば花つけた
一番寒い冬の夜　一番酷い雪の時
声にはせずに歌ってた　忘れぬために花の歌
声にはせずに歌ってた　忘れぬために花の歌

雨

八木重吉作詞
多田武彦作曲
土肥永津子ピアノ編曲

雨の音が聞こえる　雨が降っていたのだ
雨の音が聞こえる　雨が降っていたのだ
あの音のようにそっと　世の為に働いていよう
あの音のようにそっと　世の為に働いていよう
雨が上がるように　静かに死んでいこう
雨が上がるように　静かに死んでいこう

鷗

三好達治作詞
木下牧子作曲
本並美徳編曲

ついに自由は彼等のものだ　彼等空で恋をして
雲を彼等の臥所とする
ついに自由は彼等のものだ　太陽を東の壁に掛け
海が夜明けの食堂だ　ついに自由は彼等のものだ
ついに自由は彼等のものだ　彼ら自身が彼等の故郷
彼等自身が彼等の墳墓
ついに自由は彼等のものだ　太陽を西の窓に掛け
海が日暮れの舞踏室だ　ついに自由は彼等のものだ
ついに自由は彼等のものだ
一つの星を住処とし　一つの言葉で事足りる
ついに自由は彼等のものだ　朝焼けを朝の歌とし
夕焼けを夕べの歌とす　ついに自由は彼等のものだ

サッカーによせて

谷川俊太郎作詞
木下牧子作曲

蹴っ飛ばされてきたものは　蹴り返せばいいのだ
蹴っ飛ばされてきたものは　蹴り返せばいいのだ
蹴る一瞬に　君が自分に確かめるもの
蹴る一瞬に　君が誰かに委ねるもの
それはすでに　言葉ではない　それはすでに
言葉ではない
泥にまみれろ　汗にまみれろ　そこにしか
憎しみが愛へと変る　軌跡は無い
一瞬が歴史へとつながる　軌跡は無い
身体が身体とぶつかり合い　大地が空と混ざり合う
そこでしか　ほんとの心は育たない
希望はいつも泥まみれなものだ
希望はいつも汗まみれなものだ
その弾む力を失わぬために
蹴っ飛ばされてきたものは　蹴り返せばいいのだ
蹴っ飛ばされてきたものは　力一杯蹴り返せ

死んだ男の残したものは

谷川俊太郎作詞
武満　徹作曲
赤堀文雄編曲

死んだ男の残したものは
一人の妻と一人の子ども
他には何も残さなかった　墓石ひとつ残さなかった
死んだ女の残したものは
しおれた花と一人の子ども
他には何も残さなかった　着物一枚残さなかった
死んだ子どもの残したものは
捻れた足と乾いた涙
他には何も残さなかった　思い出ひとつ残さなかった
死んだ兵士の残したものは
壊れた銃とゆがんだ地球　他には何も残せなかった
平和ひとつ残せなかった
死んだ彼等の残したものは
生きてる私生きてる貴方　他には誰も残っていない
他には誰も残っていない
死んだ歴史の残したものは
輝く今日とまた来る明日　他には何も残っていない
他には何も残っていない

林道人夫

藤原和義作詞・作曲
さのよしひこ編曲

重いつるはしかついで　埃にまみれた日暮らし
黒い肌に汗を流して　林道人夫よ俺たちは
おお　俺たちは　山を砕き　道を作る男さ
故郷の便りが届けば　お天道さんも笑うよ
発破をかけろ山を砕け　林道人夫よ俺たちは
おお　俺たちは　山を砕き　道を作る男さ
風に吹かれりゃ　心も人恋しさに揺れるよ
雨が降れば急げトラック　酒場を目指して町に出る
おお　俺たちは　山を砕き　道を作る男さ
出来た道路を　車が埃をたてて走るよ
車も無い俺は歩いて　仕事を探しに旅に出る
おお　俺たちは　山を砕き　道を作る男さ

ヤマよ夕張よわが命つげよ

森谷たけし作詞
高平つぐゆき作曲
檀　美知生編曲

坂道を下る　一番方の背を　柔らかく包む
味噌汁のかおりよ　怪我をせずにと　送る言葉は
山に命掛けた心結ぶ絆　ああ夕張の川面覆う朝の霧
よ　妻たちの想い乗せ
我が山の地底深く流れてゆけ
家並みを縫って　響くざざめき　駆け抜けて踊る
細く長い影よ　ご飯だよ　帰ってと　いつもの声は
山に命掛けた暮らしの温もり　ああ夕張の山肌渡る
緑の風よ　子どもらの願い乗せ
我が山の地底深く波打ってゆけ
幾たび背負った　担架の重み　忘れることない
節くれた肩よ　あいつの切羽は　必ず守ると
山に命掛けた男たちの誓い
ああ夕張の谷をまく雪よ風よ　闘いの心乗せ
我が山の地底深く渦巻いてゆけ
闘いの心乗せ　谷をまく雪よ風よ
我が山の地底深く渦巻いてゆけ

地底のうた

荒木　栄作詞・作曲
本並美徳編曲

有明の海の底深く　地底に挑む男たち
働くものの火をかかげ　豊かな明日と平和のために
たたかい続ける　革命の前衛　炭鉱労働者
眠ったぼうやのふくらんだ　ほほをつついて表に出
れば　夜の空気の冷えびえと　朝の近さを告げている
ご安全にと妻の声　わたす弁当のぬくもりには
つらい差別に負けるなと　心をこめた同志愛
夜は暗く壁は厚い　だけれど俺たちゃ負けないぞ
職制のおどかし恐れんぞ　あのでっかい闘いで
会社や　ポリ公や　裁判所や　暴力団と
男も女も子どもも年寄りも　がんばろうの歌を武器に
スクラムを武器に　闘い続けたことを　忘れんぞ

夜の社宅の眠りの中から　あっちこっちからやって
くる仲間　悲しみも喜びも分け合う仲間
闇の中でも心は通う　地底につづく闘いめざし
今日も切羽へ　一番方出勤

崩れる炭壁　ほこりは舞い　汗はあふれ
かつぐ坑木　肩は破れ血はしたたる
ドリルはうなり　流れるコンベア　柱はきしむ
独占資本の合理化と　命を賭けた闘いが　夜も　昼も
暗い坑道地熱にやけ　漂うガス
岩の間からしたたる水　ほほを濡らし
カッターはわめき　飛び去る炭車　岩盤きしむ
（落盤だぁー）（埋まったぞー）
米日反動の搾取と　命を賭けた闘いが
夜も　昼も　続く

落盤で殺された　友の変わり果てた姿
狂おしく取りすがる　奥さんの悲しみ
おさなごは何にも知らず　背中で眠る
胸突き上げるこの怒り　この怒り
ピケでは刺し殺され　落盤では押しつぶされ
炭車のレールを　血で染めた仲間
労働強化と保安のサボで
次々に　仲間の命が奪われていく
奪った奴は誰だ　殺した奴は誰だ　奪った奴を
殺した奴を　許さないぞ　断じて許さないぞ

俺たちは栄えある　三池炭鉱労働者
団結の絆　さらに強く
真実の敵うちくだく　力にみちたたたかいを
足どり高く　進めよう
俺たちは栄えある　三池炭鉱労働者
スクラムを捨てた　仲間憎まず
真実の敵うちくだく　自信に満ちたたたかいの
手を差し伸べよう　呼びかけよう

俺たちは栄えある　三池炭鉱労働者
弾圧を恐れぬ　不敵の心
真実の敵うちくだく　勇気に満ちたたたかいで
平和の砦　かためよう　かためよう

労働者はいいぞ

橋本邦久・労働者はいいぞ制作委員会

大空よ広く　太陽よ紅く　労働者の魂よ
燃え上がれ　燃え上がれ
労働者はいいぞ　あったかくっていいぞ　どんな遠
くの見知らぬやつも　つらい仲間にゃ手を伸ばす
そうだ　俺たち労働者　仲間同士だ　元気を出そう
日焼けの顔が笑ってる
労働者のたから　労働者の魂　虫けらのような明け
暮れだけど　きびしい職場が鍛えた
そうだ　俺たち労働者　広がる仲間のスクラムに
胸はる俺の　ど根性
労働者はいいぞ　労働者はいいぞ　あー大空よ
太陽よ　労働者の魂よ　燃えあがれ　燃えあがれ

日々草

星野富弘作詞
加羽澤美濃作曲
本並美徳合唱編曲

今日もひとつ　悲しいことがあった
今日もまたひとつ　嬉しいことがあった
笑ったり　泣いたり　望んだり　あきらめたり
憎んだり　愛したり
今日もひとつ　悲しいことがあった
今日もまたひとつ　嬉しいことがあった
笑ったり　泣いたり　望んだり　あきらめたり
憎んだり　愛したり
そして　これらのひとつひとつを　柔らかく
包んでくれた　沢山の平凡なことがあった
笑ったり　泣いたり　望んだり　あきらめたり
憎んだり　愛したり

川の流れのように

秋元　康作詞
見岳　章作曲

知らず知らず歩いてきた　細く長いこの道
振り返れば遥か遠く　故郷が見える
でこぼこ道や　曲がりくねった道
地図さえ無い　それもまた人生
ああ　川の流れのように　ゆるやかに
いくつも時代はすぎて
ああ　川の流れのように　とめどなく
空がたそがれに　染まるだけ
生きることは旅すること　終わりの無いこの道
愛する人そばにつれて　夢探しながら
雨に降られて　ぬかるんだ道でも
いつかはまた　晴れる日が来るから
ああ　川の流れのように　穏やかに
この身を任せていたい
ああ　川の流れのように　移りゆく
季節　雪解けを　待ちながら
ああ　川の流れのように　穏やかに
この身を任せていたい
ああ　川の流れのように　いつまでも
青いせせらぎを　聞きながら

華厳経

柴田南雄作曲

一切世界の微塵は
一一の微塵の中より
一切如来の光明網雲をはなちて
一切世界の微塵と等しく
一一の微塵の中より
一切の香雲をいだして
あまねく法界に薫じ
普賢菩薩の所行
一切の大願　諸々の功徳海を讃歎し
一一の微塵の中より
一切衆生にひとしき　身雲をいだして
相好荘厳し　ほとけの光明をはなちて
あまねく法界を照らし
一一の微塵の中より
一切の宝形　像雲をいだし
十方一切の世界に充満し
一一の微塵の中より
一切如来の身雲をいだして
一切世界の微塵と等しく　あまねく
一切の甘露の正法を
雨降らして法界に充満す
これを十と為す

I' ve got Six Pence

福永陽一郎編曲
古荘雄二訳詩
土肥永津子ピアノ編曲

やったぜ　ロッペンス　うきうき　ロッペンス
つかんだ　ロッペンス　命の綱さ
ちょぴり使って　貸しちゃやんね
かかに送ってやろう
何も心配はない　裏切る女もいない
王様になった気分で　家に帰れるぞ　帰ろう家へ
ひかる銀貨を　握り締め
最高の日は給料日　家に帰れるぞ